

雑誌「武蔵野」復刻資料に拾う

資料紹介①

ここ十数年、復刻される資料が少なくないが、そのなかから、逐次刊行物の「武蔵野」を取りあげてみよう。

昭和四十六年に、原書房から「武蔵野」が復刻された。武蔵野といえは国木田独歩の作品が連想されるが、現在の東京にはその面影はしるべくもない。ところで、この雑誌は大正七年から、昭和十九年まで、鳥居龍藏氏の編集により、武蔵野会より発行されたものである。鳥居氏は考古学・人類学者として著名であり、その足跡は、沖繩

朝鮮、西南アジア、南アメリカ等海外に及んでいる。

創刊号の巻頭で鳥居氏が、「本会(武蔵野会)の設立と雑誌発行の趣意」と題して一文を寄せている。

「本会の目的は、専ら武蔵野に於ける自然と人文とを学び、また武蔵野に於ける趣味を養はんとする……」と述べている。

創刊号の目次を拾ってみると、次のような研究・随想等がある。

「武蔵野」創刊号(復刻版)表紙



「武蔵野国分寺遺跡考」(沼田頼輔) 武蔵野国分寺は大安寺形式によるものであり、礎石の概測から全国の国分寺中最も大なるものであること、また国分寺の瓦に郡名の文字あるものは武蔵および下野国分寺である。

「芝公園古墳発見二個の埴輪土偶」(鳥居龍藏) 東京の高台に残る奈良朝以前の古墳のなかで、最も注意すべきものは、芝公園のそれである。ここ

で埴輪土偶の首が完全な形で発掘されたが、ともに女子で髪が長く、一つは島田まげの様であり、首に二条の玉飾りをしてのこと。

「武蔵野に於ける先住民の遺跡」(大野雲外) 武蔵野の遺跡分布は八百二十六箇所におよぶ。当時においても遺跡が消滅して、また遺跡となるものが多い。ローム層の第三層の赤褐色の部分については戦後あらたな発見がなされている。

「武蔵野の風色」(小田内通敏) 十月が半ば過ぎて武蔵野特有の林相ともいべき欒林や、宅地まわりの櫟の屋敷林が、悉く落葉し骨立して灰色の疎林となった時に、澄み切った秋の大空を此疎林の間から仰ぐ時、余は何時でも東京から二三里より離れた村にあるという事を忘れると武蔵野の秋を述べる。

「武蔵野の花」(井下清) 武蔵野の春を最も力強く彩るものとして桜―玉川上水小金井の桜並木について述べる。また武蔵野が上古の密林から、焼き払われ、伐りつくされ、掘りおこされて、しだいにすすき野となり、悲しみの野となりしこと。

「女絵師の見た武蔵野の版画」(吉田優子) 江戸版画の中で武蔵野の名

所を題材としたものから、その野趣野情を紹介したのとして、松濤軒長秋の編集になる江戸名所図絵のさし絵をとりあげている。

「江戸時代の名木」(本間鶴水) 江戸十八松濤等について記す。

「武蔵野の旅―研究旅行」(山岡超舟) 会員の研究旅行として、天神山の古墳、国府旧跡、武蔵国分寺、高麗村、川越をおとなうの記。

この「武蔵野」は昭和十九年をもって廃刊せざるをえなかった。当時は大東亜戦争の後半に入り、資源不足のため、あらゆるものに統制がくわえられた。

昭和十九年一月の総会の通知に「会費二元(米一合、木炭二、三片。必ず御持参のこと)警戒警報発令の場合中止」とあるのも世相であろう。

逐次刊行物雑誌類を継続して刊行するというのは、容易ならぬ事業である。この「武蔵野」の3号にも、3号まで刊行できたのを喜んで記してあるが、「武蔵野」は、四半世紀の長きにわたり刊行されたのである。ただこのような逐次刊行物は、バックナンバーは勿論、資料として重要なものだが、散逸しやすく、後になつては容易に入手し難い。このような点からも、これを復刻するのは、大いに意義の深いものである。